GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT／NAGOYA UNIVERSITY

GSID ニューズレター

名古屋大学大学院 国際開発研究科
発行 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
☎ 〈052〉789－4953
FAX 〈052〉789－4951
GSIDホームページ//www.gsid.nagoya-u.ac.jp

NO. 5
1998. 11. 1

21世紀への展望を！

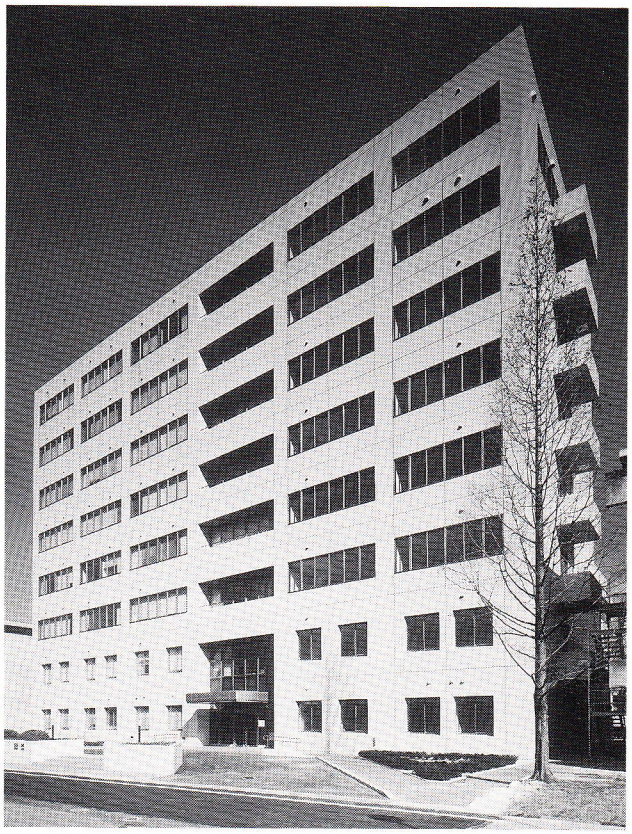
大学院国際開発研究科長　中條直樹

国際開発研究科（GSID）は，「ニューズレターNo.4」に研究科棟増築の工事中の写真を掲載し，この4月からの供用開始をお伝えしたが，予定通りにその工事も終了し，格段に改善された研究・教育条件のもと，新たな気持ちをもって教職員，院生諸君も活動を精力的に開始した。

本号では，増築部分を中心に研究科棟を紹介したい。まず，8Fの“多目的オーディトリアム”である。収容人員は約100名であるが，スタート以来，新入生ガイダンス，研究科棟増築記念式典，OFW・DFW公開セミナー（「グローバル時代のコミュニティ開発：課題と展望」），OFW事前研修と，まさに多目的に利用されている。AV機器を備え，学会の発表会場，講演会場としての利用価値もかなり高く，今後も積極的な利用を期待している。次に7Fの“第二言語情報処理室”では，30台のコンピュータを設置し，院生諸君の利用に開放しているが，諸般の事情から利用時間制限をせざるを得ず，若干の不便を掛けている。300名余の院生，研究生が今後ますますコンピュータをデータ処理等に活用する事態に対処する方策も考えねばならない。

次に4Fの“第二情報資料室”の整備を挙げておきたい。この資料室には開発・協力・文化に関わる基本文献が備わっているが，これらの収集には教官の協力はもとより，資料室スタッフの努力によるところが多い。さらに院生の要求に誠実に対応するスタッフの姿勢もあり，利用者も着実に増加しており，それに伴い夜間開館を含む利用時間の延長を望む声があることも承知しているが，現状ではなかなか要望には答えられそうにない。

1Fには，本学においてもきわめてユニークな“プレゼンテーションルーム”が整備されている。これは，各種収集資料の展示・紹介を目的としつつ，構成員の懇親をはかることを意図しての利用に供する施設である。すでに博士課程在籍院生が主として中国本土で収集した「中国年画」の展示会を開催したが，この催しは新聞にも紹介され，多くの入場者を数え，好評のうちに終了した。たびたび教官と院生が集い，あるいは専攻毎の集会が持たれているようであり，整備した意義も理解されたように思う。



増築完成した研究科棟

博士課程・修士課程院生の研究室も大幅に改善されている。これまですし詰め状態であたのが，研究室にふさわしい体裁を整えることが可能となり，平常の利用率も高く，すぐれた博士論文，修士論文が次々と誕生することを願っている。

本年もOFWをGSIDは実施する。これまでタイ，フィリピン，インドネシアの順に2ヵ年づつ研修を実施したが，本年は4年の間隔をおいて，GSID発足直後に第1回の

OFWを実施したタイに戻ることになる。タイ北東部のチェンライを拠点としての20日間弱の調査であるが，実施に当たり，様々な工夫が凝らされ，可能な限り永続的にOFWが継続できるよう，ますますのご理解と暖かいご助力をお願いしたい。もう一つの研修，DFWも昨年に引き続き，愛知県足助町を中心に今秋に実施するべく，準備を整えている。留学生が学生総数のほぼ40パーセントを占めるGSIDでは，DFWの整備も急務であり，プロジェクト室の在り方も検討しなければならない。解決すべき問題が山積しているが，地道に着実に解決の道を探っていかざるを得ない。

諸外国からの留学生は着実に増加しているが，一方日本人院生も海外へ出かけている。従来論文のための調査で海外，特に発展途上国に滞在する例は，多数あったが，最近ではカンボジアの選挙監視団への参加，またコートジボアールへのヴォランティアとしての参加などが特筆すべき事例であろう。また海外の研究機関への留学が急増し，アメリカ，イギリス，あるいはインドネシアへ出立している。彼らの多くが所期の目的を達成し，事故もなく無事に研究成果を携えて帰国する日を待ちたい。

修士課程，或いは博士課程を修了し，専門的知識を有する人材として我が国で，また母国に帰国した留学生とともに，それぞれの専門を生かして活躍することがGSIDの将来を明るいものとすることを確信している。

大学院国際開発研究科は，研究科棟増築記念講演会を5月27日（水）に同棟増築部分に新設された「多目的オーディトリアム」（8F）において，関係者100余名の出席を得て盛大に開催しました。

大学院国際開発研究科は，1991年4月に設置された国立では最初の国際開発・協力系大学院であり，いわゆる国立7大学では，本学にのみに設置された独立研究科です。本研究科は他の国際開発・協力系大学院のリーダーとしての役割が期待されています。本研究科では，1994年12月に1期工事が完了し，今回の増築により，当初の計画通り，約6,300m^{2}の研究科棟が完成いたしました。

式典は，中條研究科長の式辞に続き，本学の最初の独立研究科としての設置から研究科棟の完成に至るまで尽力されました加藤延夫本学前総長の挨拶があり，その後松尾稔総長代理山下興亜副総長から祝辞が述べられました。

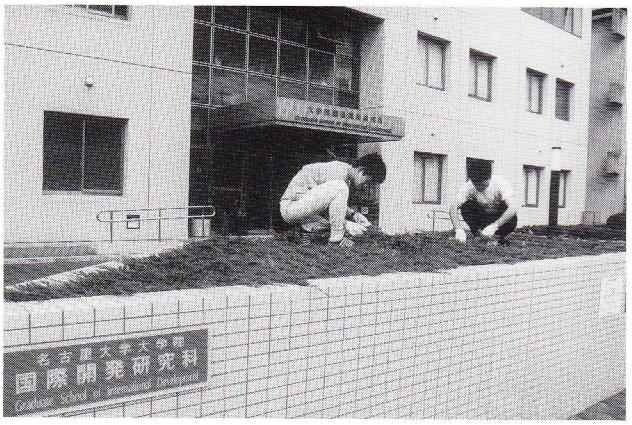
引き続き行われた講演会では，本学名誉教授小川英次元国際開発研究科長・現中京大学教授が，『技術移転とアジアの諸国－「技術」移転から「技術能力」移転へ』と題し，最近の我国の金融事情にまで及ぶ大変熱のこもった講演を巧みな話術で行われました。引き続き本学名誉教授森嶌昭夫前国際開発研究科長・現上智大学教授が，『これからの国際協力』と題し，ODA予算の削減に伴う今後の協力のあり方と本研究科と院生への期待を込めて熱弁を振るわれ，参加者は熱心に聞き入っていました。

講演会終了後，懇親会が，増築部分に新設の「プレゼンテーションルーム」（1F）において行われました。同会場で展示されている「中国年画」を鑑賞しつつ，木下英彦本学施設部長の音頭で乾杯し，各国からの留学生も交え，和やかに懇談する風景が見られました。

キャンパス・クリーンの実施

去る6月15日（月）に，名古屋大学キャンパス・クリーン・ウィークの一貫として，国際開発研究科キャンパス・クリーンを実施した。

これに伴い，各研究室等に清掃用具が常備されることとなり，教官は各研究室を，学生は各居室・学生ラウンジの清掃，整理整頓を実施し，事務は国際開発研究科棟周囲の雑草の除去，ゴミの片付け等に汗を流し，キャンパス・クリーン・ウィークに参加した。



「中国年画展」追想

国際コミュニケーション専攻研究生　川　瀬　千　春

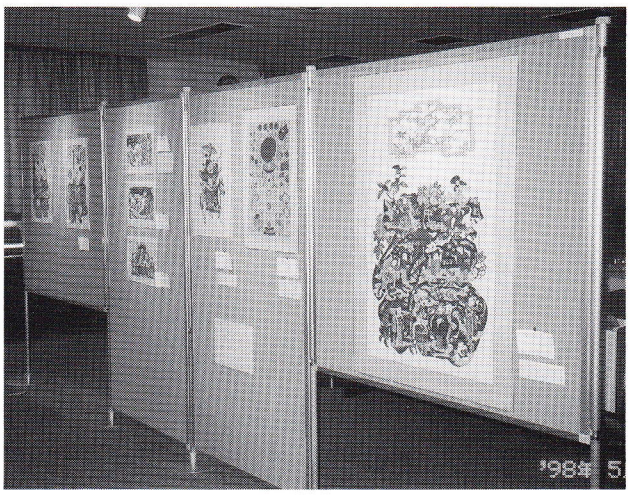
中国の人々にとって，旧暦のお正月（春節）は一年で最大のおまつりである。年末になれば，街には赤や金の装飾が目立つ。

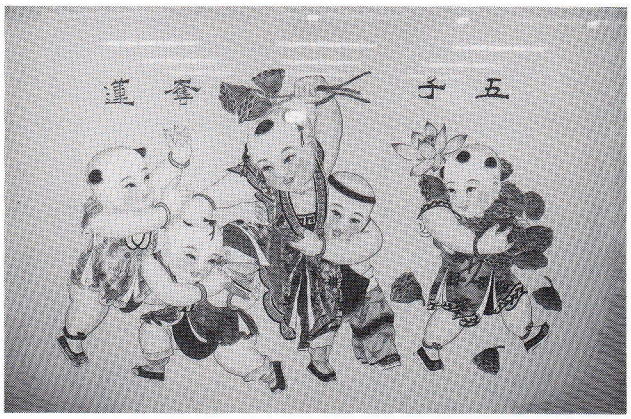
年画は，明くる年の招福厄除，財貨の獲得，立身出世，そして一人っ子政策が開始されるまでは多子などとあらゆる願いを込め，その上新年の室内装飾をもかねて，年末に室内や門扉に貼付される絵画である。一旦貼付したら風化にまかせて剥がされることはなく，翌年末には，また同じ願いを込めて新しいものに貼り替えられる。その起源は漢代にまで遡ることができ，宋代には年末の市場に並ぶようになった。さらに印刷技術や輸送手段の発達によって，各地に年画の生産地が形成され，民衆間には明代以降に普及し定着した。こうした年画貼付の習慣は，とくに農村部では現在も欠くことのできない旧正月の風習となっている。

中国社会に定着した年画貼付の習慣は，我が国では，昨今愛好家の間では注目されているが，まだ「年画」と聞いて，「年賀」が想起される場合が多いようである。今回展示の機会を得て，私の意図したところは，一つには，年画という民衆間に息づく絵画を紹介することであった。そこで，中国各地の年画産地の特色をもつ年画を一堂に展示した。

中国社会では，民衆の工芸とされ，芸術の範疇に入れられず，近代に至るまで年画は顧みられることはなかった。しかし，今回展示した清代の天津楊柳青年画に代表されるように，その精緻で華やかな描画ま，見飽きることのない美術作品の風格が充分にそなわっている。

展示目的の二つ目は，年画の有する視覚的な情報伝達メディアとしての機能を紹介することであった。年画の画面からは，吉祥モチーフを指す名詞と同音異義の漢字により，様々なメッセージが発せられている。たとえば，「連年有





余」と題された年画のモチーフには，よく肥えた子供が，蓮の上で鯉（魚）を抱いている様が描かれているが，「蓮」は，連続を意味する「連」と同音であり，「魚」は「余」と同音である。つまり一年中余裕がありますように，という願いが込められている。また子供そのものが，幸福や子宝のイメージをもつモチーフである。このように民衆間に普及した年画は，一つのメッセージを，お正月という時期に広範囲の人々に同時に伝えることのできる視覚的な情報伝達メディアといえる。

そして，今回の年画展で，最も伝えたかったのは，近現代中国社会に展開された，戦闘，革命などの動きの中で，民衆の素朴な願いを込めて貼付されてきた年画とは異なる意義の年画が制作されていたことである。つまり，年画の情報伝達メディアとしての機能に着目した為政者によって，年画はプロパガンダの道具ともされたのである。展示品の「プロパガンダ年画」と題した年画には，為政者の意図や当時の世相が表れ，民衆の願いを描出した伝統年画とは異なり，中国の政治がうごめいていた。

そうしたものの顕著な例である文化大革命期の年画に関して，いくつか質問や感想を寄せていただいた。文革期には，年画は四つの古い悪（古い思想，古い文化，古い風俗，古い習慣）の一つとされ，それまでの年画及び制作者は破壊の対象となってしまった。戦火をくぐり，幸いにも無事であった清代以前の年画も版木も，再び人災に遭い，その多くが散逸してしまった。ところが，文革期の指導者達は，年画を破壊する一方で，毛沢東をモチーフとし，革命のスローガンを朱筆して挿入した年画を盛んに制作した。年画は完全なプロパガンダの手段となったのである。

年画の蒐集は，1993年以来行ってきた。上記の目的を持って蒐集に当たってきたので，全国各地の，さまざまな年代の年画のみならず，その制作道具，版木なども展示できるように努めた。前述したように，もともと年画は，中国で

は一年毎に更新され保存の対象ではない上に，戦争や文革を経過し，とくに古いものを蒐集するのは困難であった。しかし「中国年画展」では，時間的にも地理的にも幅広い展示ができたと考えている。

展示時間の制限が多く，参観者にはご迷惑をおかけした思う。しかしながら，100人余りの記帳をいただき，学外の一般の方にも興味を持ってご覧いただけたようである。この場を借りてお越しいただいたすべての方にお礼申し上げます。そして，良好な展示条件をいただき，また展示設営に当たりご協力いただいた諸先生方並びに本研究科事務局の皆様に心より感謝申し上げます。また，学外の寺門氏，毛利氏に心よりお礼申し上げます。

特集記事：国際協力の現場から

この夏，日本の国際協力関係者の間に一つの衝撃が走った。国連タジキスタン監視団の秋野豊・前筑波大学助教授の射殺事件である。国情不安定な中で，人々の平和な生活を希求し奔走し続ける人々が増えてきている。本研究科においても，海外に赴き国際協力の現場で活躍する人々が数多くいる。国連機関の一員として，あるいはNGOの一員として，さらには外務省派遣の調査員としてなど形態はさまざまである。今回のニューズレターでは，そのような中からお二人の体験談をご紹介しようと思う。

まず，博士前期課程2年生の安藤由香里さんの，コートジボアールにおける難民キャンプでの体験談である。彼女の体験は，若者に難民キャンプの活動を体験してもらおうという，国連難民高等弁務官事務所の企画に参加したものである。高等弁務官である緒方貞子さんの名をとって，「キャンプ・サダコ」と呼ばれており，これまでの6年間に51人の日本の若者が参加している。安藤さんは，日本の子ども達が描いた絵をもって行き，難民キャンプの子ども達にミニ展覧会を行った。また，難民キャンプの子ども達が描いた絵を今度は日本で紹介し，絵を媒体にした交流を行った。

次にご紹介するのは，博士後期課程3年生の野田真里さんの，カンボジアにおける選挙監視員としての体験談である。この選挙監視には，世界各国から500人の選挙監視員が参加し，日本からも32人が派遣された。国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）による総選挙から5年，彼は再び総選挙を行うカンボジアの選挙監視員に志願し，公正かつ公平な選挙が行われるようにと現地に向かった。

コートジボワール難民キャンプ研修「キャンプ・サダコ」に参加して

国際協力専攻 M2　安　藤　由香里

1998年7月21日コートジボワール最西端のタブー難民キャンプに首都アビジャンから向かった。トヨタランドクルーザーで約6時間，大西洋が眼前に広がった時はその美しさにしばし感動してしまった。国連難民高等弁務官（UNHCR）タブー事務所で一通りの挨拶を終え，一ヶ月滞在するための宿探しに向かったのだが，事務所から徒歩3分のバンガローは，ヤモリとの共存さえいとわなければ非常に快適であった。タブーは名古屋に負けず湿度が高い地域のため，マラリア対策が必須となる。日没後の外出で，携帯用蚊取り線香ケースを持ち歩いたわたしは，周囲から奇異の目でみられていたが，徐々に誰もがその効用に納得するようになつていった。

UNHCRの研修第一日目は，現在遂行されている自発的難民帰還プログラムのコンボイ（トラックの連隊）に付き添ってコートジボワールとリベリアの国境まで難民を送り届け，リベリア側のスタッフに引き継ぐことであった。UNHCRのリベリア側スタッフとリベリア警察，入国管理官が自国民の帰還を待ち構えている。難民たちの様子は淡々としていて，帰還に伴う感情を見て取る事は困難である。この地方は，雨季のため前日の降雨量によって，道路の状態が左右されるため，リベリアメリーランド州プリボーへの第一回目の難民帰還に付き添っていた日には，道路が泥沼と化していてトラックが泥にはまった状態のまま3時間立ち往生という状態も経験した。

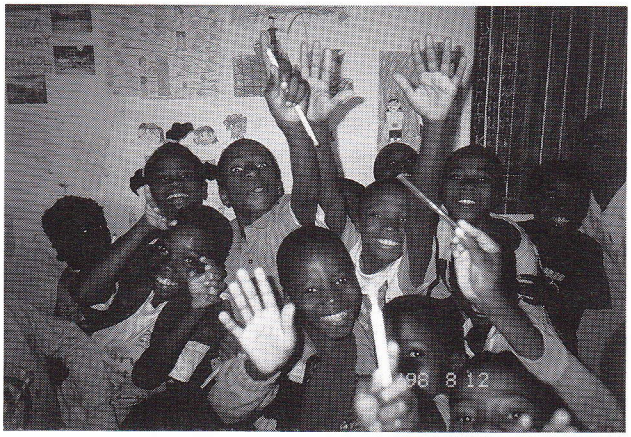
タブーでの日常業務は，自発的難民帰還のための登録作業で，いつ，どこへ，何人で行きたいかの希望を難民登録カードに基づき調査し，書類の作成を行う。自分の年齢を知らない人が多く，時には自分の子どもの名前を知らない親に直面することもあった。登録以外では，UNHCRが焦点を当てている3つの枠①老年者②一人身の女性③障害を持つ人の自立支援プログラムを普及させるために，村々をまわり知らせていくことも行った。その際に村長や学校の先生に依頼して子どもたちを集めて，絵画を描いたり，即

席折り紙教室を開いたりもした。物資が不足しているため，はじめてクレヨンや画用紙を手にする子どもたちが多く，大騒ぎをしながら絵を描く姿が非常に印象的である。

コートジボワールではUNHCRのパートナーとしていくつかの国際組織が活動をしている。自発的難民帰還の輸送を行っているのはGTZ（ドイツの国際協力機関）と国際赤十字（ICRC）で，GTZは職業訓練校の運営も行っている。ADRA（教育関連NGO）はタブー地域の初等，中等教育を担当しており，難民と地元の人々の区別なく無償で教育を受けられるシステムが確立している。International Rescue Committee（IRC）はコミュニティを中心とした小規模金融を行っており，リベリアへの帰還後もシステムが継続されるように取り組んでいた。ANADER（コートジボワール農業省の機関）は，稲作とキャッサバの栽培に取り組んでおり，大半の難民の生活を支えているのはこうした米とキャッサバの収穫によるものである。CARITAS（社会関連NGO）は幼稚園を運営しており，8：00－14：00まで，2－5歳の難民を受け入れている。幼稚園の昼食は世界食糧計画（WFP）から支給されるコーンミールなどでまかなわれていた。

医療サービスは，緊急の場合と1歳以下の子どもそして出産に対しては無償で行われるが，その他は5割の自己負担である。タブー周辺地域には150の村があり，32の小規模医療施設をタブーが統括している。タブーでの最大の問題は，水の供給が6：00－8：00に限られている事である。水不足に伴う下痢が心配されている。マラリアも深刻で，蚊帳が5,000CFA（約1,250円）で売られているが普及状態は良いとは言えない。また，家族計画に力が入れられており，病院には二つのポスターが貼られている。一つは，子どもが少なく微笑んでいる家族，他は，子どもが多く涙を流している家族である。このポスターは字が読めない人にもわかりやすい配慮がされている。

1ヶ月の滞在期間を通して，非常に貴重な経験をする事ができ，現在のわたしが行うべきことが少し明確になったような気がする。



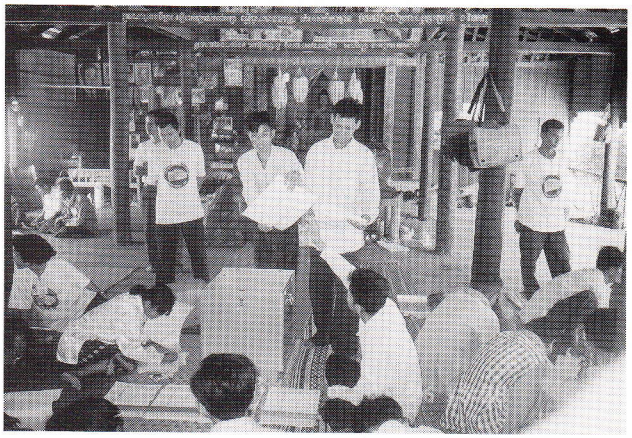
「草の根民主主義の胎動 —カンボジア選挙監視報告」

国際開発専攻 D3　野　田　真　里

筆者は去る7月17日から8月1日，日本国政府の派遣で国際選挙監視団（JIOG）の一員として，カンボジア王国議会選挙の監視業務に携わった。GSID関係者としては私の他に，浜田さん（GSID，国際開発専攻D3）とOBの四本健二さん（名古屋経済大学助教授）も参加した。この3人のカンボジアとの繋がりは深く，私はNGOで，浜田さんと四本さんはJICAの専門家として関わってきている。こうした個人レベルの繋がりに加えて，GSIDが王立プノンペン大学と学術協定を結び，GSIDとカンボジアとの関係は密である。

今回は国際社会から500名うち日本から32名が選挙監視要員として派遣され，自由で公正な選挙の実現のために，カンボジア王国政府ならびにNGO，カンボジアの人々と共に汗を流してきた。今回の選挙は1993年の国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）による選挙とは全く違う性格を持つ重要な選挙であった。というのは，今回の選挙はカンボジア人自らの手による初めての選挙ということでカンボジアが民主主義を定着させていく上での大切な第一歩であった。また，昨年7月の政変によって国際社会から孤立したが，今回，カンボジアが「自由で公正」な選挙を行い，国際社会がそれを認めることは，援助再開，ASEAN加盟等，対外的にも重要な意味を持つものである。日本チームはプノンペン市，タケオ州，カンダール州，プレイベン州，スバイリエン州に展開，筆者はプレイベン州のカンポントラバエク郡にて，投開票を見守った。

筆者の監視活動を通じての，今回の選挙の評価であるが，先ず第1に，住民参加型民主主義への第一歩であったとおおむね肯定的に見ている。私が関わった投開票所のスタッフは一様に国際選挙監視員のプレゼンスの重要性を評価していた。個人的には投開票のプロセスだけを見れば，カンボジア人はほぼ完璧に手順に沿ってやっており，何の問題も無い様であった。



投票・開票が終わった後は，立場の違いを超えて，自らの手で選挙を成し遂げた喜びに満ち溢れていた。特に，行政村選挙管理委員会（CEC），投票所委員会（PSC）のメンバーは普通の住民であったことは特筆に価する。有権者の意識も高く，投票率は軒並み90％を超え，95％に迫る投票所も少なくなかった。少なくとも私が見た投票所・開票所では，今回の投開票にかんして不満を言うものはいなかった。とはいえ，様々な問題や限界があったことも確かである。言うまでもなく，国際選挙監視員が展開したのはごく一部の地域に限られ，しかも期間的にも投開票の数日と限られたものであった。確かに，これをもって今回の選挙全体が本当に「自由で公正」であったかを判断するには限界がある。実際，日本チームが展開した地域でも，「無言の圧力」にはじまり，選挙結果へのクレーム，狙撃事件等の問題も生じた。

最後に，国家選挙管理委員会の委員長を勤めたチェンポン氏は次のように述べている。「今何の選挙はパーフェクトでないかもしれない。しかし，次の選挙，その次の選挙と一歩ずつ自由で公正な選挙を実現していくしかない」と言った。確かに，投開票のプロセス，そしてそれ以前のプロセスにおいても様々な問題があったことは確かである。しかしそれらは選挙結果全体を覆すほどの大きな問題であったとは考えにくい。各政党はいたずらに政争にはしらず，今回の選挙結果を受け入れ，国会の場で論戦を戦わせて，カンボジアの民主主義を成熟させていくべきではないだろうか。それが，草の根で今回の選挙を担ったカンボジアの国民，そして国際社会に対する信頼を勝ち取る道であろう。

また，市民社会，国際社会は今回の選挙の成果と問題点を踏まえ，今後のカンボジアの民主化と発展のためにその動向を注視しつつ，必要な支援を行っていくのが良いのではないか。

客員研究員の紹介

［外国人研究員］

スミトラ　シーウォン：タイ王国
　チュラロンコン大学：副学長
　研究課題：タイ国の地域開発－チェンライ県のケース・スタディー
　期　　間：平成10年４月１日～平成10年６月30日

カネヤス　ジュリア　クミ：ブラジル連邦共和国
　ジョアキン・ナブコ研究所本部　情報統合部：部長研究員
　研究課題：インターネット上のデーターベースの構築と展開
　期　　間：平成10年４月１日～平成10年６月30日

レン　シヤオ：中華人民共和国
　復旦大学国際政治系：準教授
　研究課題：開発と民主化
　期　　間：平成10年４月１日～平成10年８月31日

レクータイ　パイサン：タイ王国
　チュラロンコン大学経済学部：準教授
　研究課題：タイ国の農村総合開発－チェンライ県のケース・スタディー
　期　　間：平成10年７月１ 日～平成10年9月30日

コズロフ　ユリー　ワシリエヴィチ：ロシア連邦
　サンクト・ペテルブルグ国立大学東洋学部日本語：助教授
　研究課題：日本語動詞のアスペクト研究
　期　　間：平成10年７月１日～平成11年３月31日

ホワン　シューリン：中華人民共和国
　上海水産大学：教授　科学研究部長
　研究課題：国際海洋法の研究
　期　　間：平成10年10月１日～平成11年３月31日

ジョン　ヨン　ウック：大韓民国
　韓国中央大学：教授
　研究課題：日本企業の国際化過程に関する研究－段階的な技術移転に焦点を当てて－
　期　　間：平成10年10月１日～平成11年３月31日

［国内研究員］

［国内研究員］

小西　　歩：アジア開発銀行：上席教育専門官
　研究課題：移行経済下における教育部門援助：高等教育改革に向けて
　期　　間：平成10年４月１日～平成10年６月30日

岡田　尚美：国際開発高等研究機構事業部：次長
　研究課題：プロジェクト・サイクル・マネジメント
　期　　間：平成10年７月１日～平成10年10月30日

城戸　康彰：産能大学経営情報学部：教授
　研究課題：経営のグローバル化と国際人材育成
　期　　間：平成10年11月１日～平成11年３月31日

時田　邦浩：国際協力事業団国際総合研究所：国際協力専門員
　研究課題：農村地域開発と技術協力
　期　　間：平成10年４月１日～平成10年６月30日

柴田佳代子：世界銀行：情報マネジメントスペシャリスト
　研究課題：開発のためのジェンダー知識管理システム
　期　　間：平成10年７月１日～平成10年９月30日

阿部　義章：早稲田大学：教授
研究課題：経済成長と平等に関する研究
期　　間：平成10年10月1日～平成10年12月31日
小幡　俊弘：国際協力事業団：客員専門員
研究課題：途上国における教育援助
期　　間：平成11年1月1日～平成11年3月31日
小林　　誠：立命館大学国際関係学部：助教授
研究課題：グローバリゼーションによる国民・国家の衰退と再生
期　　間：平成10年4月1日～平成10年9月30日
坂元　茂樹：関西大学法学部：教授
研究課題：人権条約の解釈及び適用に関する諸問題
期　　間：平成10年10月1日～平成10年12月31日

大野　盛雄：中近東文化センター：理事
研究課題：西アジア地域研究の構築を目指して－農村地域の社会・文化のフィールドワークより－
期　　間：平成11年1月1日～平成11年3月31日
磯田　厚子：女子栄養大学栄養学部：助教授
研究課題：NGOの国際協力プロジェクトの評価方法に関する研究
期　　間：平成10年4月1日～平成10年6月30日

山田　順一：海外経済協力基金開発援助研究所：主任研究員
研究課題：日本の国際協力－ODAを中心として－
期　　間：平成10年7月1日～平成10年9月30日
富岡　　仁：名古屋経済大学：教授
研究課題：国際環境法
期　　間：平成10年10月1日～平成10年12月31日
中西　　洋：法政大学社会学部：教授
研究課題：共同性の比較；日本・アジア・ヨーロッパ
期　　間：平成11年1月1日～平成11年3月31日
秦　喜美恵：愛知淑徳大学文学部：教授
研究課題：日本語コミュニケーションにおける待遇表現と人間関係
期　　間：平成10年4月1日～平成10年6月30日
富本　幾文：国際協力事業団：客員専門員
研究課題：日本の国際協力－ODAを中心として－
期　　間：平成10年7月1日～平成10年9月30日
秦　喜美恵：愛知淑徳大学文学部：教授
研究課題：日本語の待遇表現における丁寧度の数量化の試み
期　　間：平成10年10月1日～平成11年3月31日

出版物案内

最新　国際開発研究科発行の印刷物

開発・文化叢書25
中国における郷鎮工業の展開と環境問題
開発・文化叢書26
Universalizing Basic Education in Indonesia
開発・文化叢書27
比較語彙研究の試み2
開発・文化叢書28
ジェンダー研究の現在
開発・文化叢書29
転換期の日本の国際協力
『国際開発研究フォーラム』10
江崎光男・孫林「中国経済の成長会計分析（1981-95年）
加藤久和・市村雅一「東アジアにおける酸性雨モニタリングの課題と展望－ヨーロッパの経験から学ぶ」
Aya OKADA, "Effects of Stabilization and Structural Adjustment on Education in Kenya: The Role of the State in Managing Economic Austerity"
Masatoshi SUGIURA and Saeko KOMORI, "CALL Material Authoring Environment for Language Instructors: Java-Based Authoring Tools (J-BAT)"
李　殷娥「日本語と韓国語のオノマトペに関して－反復形式を中心に－」
Karunaratne HETTIGE VON, "Income Inequality in Sri Lanka: A Disaggregated Analysis by Factor Incomes"
Pei-Yen LIN, "Development of Japan-Malaysia Foreign Direct Investment and Intra-Industry Trade"
大平　剛「国連の新たな開発援助戦略とその実施における問題点－現地化と常駐代表制度の強化を中心として－」
杉山悦子「途上国の地域開発と多国籍企業－メキシコの『マキラドーラ』での実態調査を踏まえて－」
田中英式「日系企業の技術移転に関する研究－台湾所在の日系企業におけるスピンアウト、及び下請企業への技術指導に重点を置いて－」
若松孝司「カリブ海地域における1980年代以降の地域統合再興に関する一考察」

＊出版物に関するお問い合わせ先
Tel（052）789-5080 Fax（052）789-4951 大平　剛

学術交流協定

本研究科と王立プノンペン大学及び同大学教育学部との学術交流協定を平成10年1月9日に，高麗大学校国際大学院との学術交流協定を平成10年1月22日に，イースト・アングリア大学開発学部との学術交流協定を平成10年4月20日に締結しましたので，お知らせします。

王立プノンペン大学及び同大学教育学部は，幾多の苦難の時期を乗り越えて，カンボジア王国の高等教育機関として，中心的存在として発展し，国際援助機関やNGOの支援に支えられ，一層の高等教育機関・高等教育開発を目指しています。

高麗大学校国際大学院は，韓国の国際化を支援し，世界市場の開拓に役立つ地域・通商専門家を養成することを目的とし，韓国に関心を持つ外国人に対して韓国の言語・文化・歴史等を体系的に紹介しています。

イースト・アングリア大学開発学部は，イギリスで第一級の発展途上国の開発に関わる研究を行っている有数の研究科となり，多くの教官は海外開発グループのメンバーとして様々な開発プロジェクトに参加し，それらを今後のプロジェクトにフィードバックする役割を果たしています。

スタッフの人事異動

〔教　官〕

H10. 3.31　停年
　潮木　守一　教授（武蔵野女子大学へ）

H10. 3.31　辞職
　重松　伸司　教授（三重県立看護大学へ）

H10. 3.31　辞職
　林田　和則　助手（勉学のため）

H10. 4. 1　昇任
　早川眞一郎　教授（東北大学法学部へ）

H10. 4. 1　配置換
　飯田　秀敏　教授（言語文化部へ）

H10. 4. 1　採用
　大平　　剛　助手（紀要出版物担当）

H10. 4. 1　昇任
　高橋　公明　教授（助教授から）

H10. 4. 1　配置換
　中條　直樹　教授（言語文化部から）

H10. 4. 1～11. 3.31　併任
　中條　直樹　教授（研究科長再任）

H10. 4. 1　配置換
　杉浦　正利　助教授（言語文化部から）

H10. 4.30　辞職
　チョウー サン ウイン　助手（愛知学院大学へ）

H10. 6.16　昇任
　櫻井　龍彦　教授（助教授から）

H10. 6.30　辞職
　廣里　恭史　助教授（アジア開発銀行教育専門官へ）

H10. 7.12　辞職
　谷村　光浩　助手（国際開発高等教育機構へ）

H10. 9. 1　採用
　杉山　悦子　助手（国際開発専攻D1，実地研修担当助手）

H10. 9. 1　採用
　スーザン メアリー テナント　助手（宮崎国際大学から、論文執筆担当助手）

H10.10. 1　転任
　大塚　　豊　教授（広島大学教育研究センターから）

H10.10. 1　採用
　久保田　隆　講師（日本銀行から）

H10.10. 1　採用
　桃木　厚子　助教授（奈良女子大学、大阪外国語大学非常勤講師）

協力教官の変更　H10. 4. 1から

山田　悦夫教授から	千田　純一教授へ
竹内　信仁教授から	大橋　勇雄教授へ
飯田　　穆教授から	牧戸　孝郎教授へ
皆川　　正教授から	高桑　宗右ヱ門教授へ
加藤　鉦治教授から	的場　正美教授へ
佐分　晴夫教授から	定形　　衛教授へ
小坂　光一教授から	奥田　智樹助教授へ
杉浦　正利助教授から	成田　克史助教授へ
柴田　庄一教授から	内田　綾子助教授へ
中條　直樹教授から	笠井　直美講師へ
ピーター B. ハーイ教授から	有川貫太郎教授へ
藤原　雅憲助教授から	浜田　義孝助教授へ

「事務官」

H10. 4. 1　転　任　奥谷　明稔（岡崎国立共同研究機構から）

H10. 4. 1　配置換　佐田　隆昭（工学部用度掛から）

H10. 4. 1　配置換　西村　伸一（共通教育室から）

H10. 4. 1　配置換　出口　秀典（総務部国際交流課へ）

H10. 4. 1　配置換　伊藤　秀典（農学部教務学生掛へ）

H10. 4. 1　配置換　倉橋　克夫（工学部管理掛へ）